

関寺小町

世阿弥作

ワキ 関寺の住僧

ワキヅレ 同僧

シテ 小野小町

子方 寺の稚児

地は 近江

季は 七月

ワキ次第

「待ち得て今ぞ秋に逢ふ。く。星の祭を急がん。

詞

「是は江州関寺の住僧にて候。今日は七月七日にて候ふ程に。七夕の祭を取り行ひ候。又此山陰に老女の菴を結びて候ふが。歌道を極めたる由申し候ふ程に。幼き人々を伴なひ申し。彼老女の物語をも承らばやと存じ候。

一同サシ

「颯々たる涼風と衰鬢と。一時に来る初秋の。七日の夕に早なりぬ。

ワキ

「今日七夕の手向とて。糸竹呂律の色々に。

ツレ

「ことを尽して。

ワキ

「敷島の。

歌

「道を願ひの糸はへて。く。織るや錦のはた薄。

花をも添へて秋草の。露の玉琴かき鳴らす。松風までも折からの。手向に叶ふ夕かな。く。

シテサシ

「朝に一鉢を得ざれども求むるに能はず。草衣夕の肌を隠さゞれどもおぎぬふに便あり。花は雨の過

ぐるによつて紅正に老いたり。柳は風に欺かれて
緑漸く垂れり。人更に若き事なし。終には老いの
鶯の。百轉の春は来れども。昔に帰る秋はなし。
あら来し方恋しや。く。

ワキ詞

「如何に老女に申すべき事の候。是は関寺に住む者
にて候。此寺の児達歌を御稽古にて候ふが。老女
の御事を聞き給ひ。歌をよむべき様をも問ひ申し。
又御物語をも承らん為めに。児達も是まで御出で
にて候。

シテ詞

「是は思ひも寄らぬ事を承り候ふ物かな。埋木の人
知れぬ事となり。花薄穂に出だすべきにしもあら
ず。心を種として言葉の花色香に染まば。などか
其風を得ざらん。優しくも幼き人の御心に好き給
ふ物かな。

ワキ

「先々普く人の翫び候ふは。難波津の歌を以て。手
習ふ人の始めにもすべき由聞え候ふよなふ。

シテ「夫れ歌は神代より生まれども。文字の数定まらずして。事の心分き難かりけらし。今人の代となりて。めでたかりし世継をよみ治めし詠歌なればとて。難波津の歌を翫び候。

ワキ「又浅香山の歌は。王の御心を和らげし故に。是れ又めでたき詠歌よなふ。

シテ「実によく心得給ひたり。此二歌を父母として。

ワキ「手習ふ人の始めとなりて。

シテ「高き賤しき人をも分かず。

ワキ「都鄙遠国の鄙人や。

シテ「我等如きの庶人までも。

ワキ「好ける心に。

シテ「近江の海の。

地「さゝ波や。浜の真砂は尽くるとも。く。よむ言の葉はよも尽きじ。青柳の糸絶えず。松の葉の散り失せぬ。種は心と思し召せ。たとひ時移り事去

るとも。此歌の文字あらば。鳥の跡も尽きせじや。
鳥の跡も尽きまじ。

ワキ詞

「有難う候。古き歌人の言葉多しといへども。女の歌は稀なるに。老女の御事例少なうこそ候へ。我背子が来べき宵なりさゝがにの。蜘蛛の振舞かねてしるしも。是は女の歌候ふか。

8

シテ

「是は古へ衣通姫の御歌なり。衣通姫とは允恭天皇の后にてまします。形の如く我等も其流をこそ学び候へ。

ワキ

「さては衣通姫の流を学び給ふかや。近年聞えたる小野の小町こそ。衣通姫の流とは承れ。わびぬれば身を浮草の根を絶えて。誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ。是は小町の歌候ふな。

シテ

「是は大江の惟章が心変りせし程に。世の中物うかりしに。文屋の康秀が三河の守になりて下りし時。田舎にて心をも慰めよかしと。我を誘ひし程によ

9

みし歌なり。忘れて年を経し物を。聞けば涙の古
事の。又思はるゝ悲しさよ。

^{ワキ}「不思議やなわびぬればの歌は。我よみたりしと承
る。又衣通姫の流と聞えつるも小町なり。実に年
月を考ふるに。老女は百に及ぶといへば。たとひ
小町の存ふるとも。いまだ此世に在るべきなれば。
今は疑ふ所もなく。御身は小町の果ぞとよ。さの
みな包み給ひそとよ。

^{シテ}「いや小町とは恥かしや。色見えてとこそよみし物
を。

^地「移ろふ物は世の中の。人の心の花や見ゆる。恥か
しやわびぬれば。身を浮草の根を絶えて。誘ふ水
あらば今も。いなんとぞ思ふ恥かしや。

^{地クリ}「実にや包めども。袖に溜らぬ白玉は。人を見ぬ目
の涙の雨。古事のみを思草の。花しをれたる身の
果まで。何白露の名残ならん。

シテサシ「思ひつゝ寐ればや人の見えつらんと。

地「よみしも今は身の上に。存へ来ぬる年月を。送り
迎へて春秋の。露行き霜来つて草葉変じ。虫の音
も枯れたり。

シテ「生命既に限りと為つて。

地「唯槿花一日の栄に同じ。

クセ「あるは無く。無きは数添ふ世の中に。あはれ何れ
の日まで歎かんと。詠ぜし事も我ながら。いつま

で草の花散じ。葉落ちても残りけるは。露の命な
りけるぞ。恋しの昔や。忍ばしの古への身やと。
思ひし時だにも。また古事になり行く身の。せめ
て今は又。はじめの老ぞ恋しき。あはれ実に古へ
は。一夜泊りし宿までも。玳瑁を飾り。垣に金花
を懸け。戸には水精を連ねつゝ。鸞輿属車の玉衣
の。色を飾りて敷妙の。枕つく。妻屋の内にして
は。花の錦の茵の起き臥しなりし身なれども。今

は埴生の。こや玉を敷きし床ならん。

シテ「関寺の鐘の声。

地「諸行無常と聞くなれども。老耳には益もなし。逢
坂の山風の。是生滅法の理をも得ばこそ。飛花落
葉のをりくは。好ける道とて草の戸に。硯を馴
らしつゝ。筆を染めて藻塩草。書くや言の葉の枯々
に。あはれなるやうにて強からず。強からぬは女
の歌なれば。いとゞしく老の身の。弱り行く果ぞ

悲しき。

子詞「如何に申し候。七夕の祭おそなはり候。老女をも
伴なひ御申し候へ。

ワキ「如何に老女。七夕の祭を御出で有つて御覧候へ。

シテ「いやく老女の事は憚りにて候ふ程に。思ひも寄
らず候。

ワキ「何の苦しう候ふべき。唯々御出で候へとよ。

地「七夕の。織る糸竹の手向草。幾年経てか、げろふ

の。小野の小町の百年に。及ぶや天つ星合の。雲の上人に馴れくし。袖も今は麻衣の。浅ましや痛はしや。目もあてられぬ有様。とても今宵は七夕の。く。手向の数も色々の。或は糸竹に。懸けて廻らす盃の。雪を受けたる。童舞の袖ぞ面白き。星祭るなり呉竹の。(子方三段の舞)

シテ
「世々を経て住む行末の。

地
「いく久しさぞ万歳楽。

シテ詞
「あら面白の唯今の舞の袖やな。むかし豊の明の五節の舞姫の袖をこそ五度返しゝが。是は又七夕の手向の袖ならば。七返しにてや有るべき。狂人走れば不狂人も走るとかや。今の童舞の袖に引かれて。狂人こそ走り候へ。百年は。(序の舞)

シテワカ
「百年は。花に宿りし胡蝶の舞。
地
「あはれなりく。老木の花の枝。

シテ
「さす袖も手忘れ。

地「もすそも足弱く。

シテ「たゞよふ波の。

地「立ち舞ふ袂はひるがへせども。昔に返す袖はあらばこそ。

シテ「あら恋しの古へやな。

地「さる程に初秋の短夜。はや明方の関寺の鐘。

シテ「鳥もしきりに。

地「告げ渡る東雲の。あさまにもならば。

シテ「羽束師の杜の。

地「羽束師の。杜の木隠れもよもあらじ。暇申して帰るとて。杖にすがりてよろくと。本の藁屋に帰りけり。百年の姥と聞えしは。小町が果の名なりけり。く。